

# 加賀検定

## 第9回 加賀ふるさと検定試験問題

初級 (全60問)

**解答・解説付**

2021年12月19日

加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会

各問題に対して、それぞれ①～④までの選択肢の中に正解が1つあります。解答用紙に、正解と考える番号を1つだけ○で囲って下さい。(黒色のエンピツもしくはボールペンを使用のこと)

- 1 大聖寺川(全長 38 km)、動橋川(全長 20.4 km)の2つの河川は、いずれも( )  
を源流げんりゅうとしている。

①富士写ヶ岳      ②大日山だいにちさん      ③白山      ④刈安山かりやすやま

(正解②)

当市には、大聖寺川と動橋川の2大河川があります。大聖寺川は大日山を源流とし、全長 38.0 km、県内では手取川・梯川に次ぐ3番目に長い川となっています。

- 2 加賀市内のアメダス(自動気象データかんそくじょ観測所)は、山中温泉( )町に設置されている。

①菅谷      ②杉水      ③栢野      ④九谷

(正解①)

アメダスとは、自動気象データ収集システムに基づく気象観測所の通称のことで、全国に約 1,300 ヲ所が設置されています。石川県には 16 ヲ所ほどがあり、南加賀では小松、白山河地、白山白峰、加賀菅谷の 4 ヲ所にアメダスが設置されています。

- 3 鴨池わたにくる渡り鳥の( )は、絶滅危惧種ぜつめつ き ぐ しゅに指定されている。

①トモエガモ      ②マガン      ③ヒシクイ      ④コハクチョウ

(正解①)

市内の湖沼には、冬季にカモ類が多く飛来してきます。特に片野鴨池には天然記念物のマガン・ヒシクイ・トモエガモなどが飛来し、水鳥の重要な生息地として、平成 5 年(1993)にラムサール条約の登録湿地となりました。また、絶滅危惧種トモエガモの国内最大の飛来地としても知られています。

- 4 加賀市の植生しょくせいは、そのほとんどが( )クラス域で、人の手によって管理されてきた里山しゃそうをはじめ、神社の社叢しゃそうなどもこの植生に含まれる。

①ブナ      ②ヤブツバキ      ③タブノキ      ④コマクサ

(正解②)

日本人の主な生活区域は、稲作を伴う定住生活を始めたころから、ヤブツバキクラス域、すなわち照葉樹林域です。山中温泉の大土町や富士写ヶ岳より南側がブナクラス域に属していますが、加賀市のほとんどはヤブツバキクラス域といえます。

- 5 片野海岸には、( )跡かるいしぎょうかいがんと呼ばれる軽石凝灰岩きがんぐんからなる奇岩群があるが、これらは、海底火山の噴火による火砕流かさいりゅうにより形成されたものと考えられている。

①わらしべ屋敷      ②奇岩屋敷      ③十村屋敷      ④長者屋敷

(正解④)

片野海岸の長者屋敷跡では、軽石凝灰岩が露出した台地および安山岩塊を間近に見ることができます。これらは海底火山の噴火による火砕流によるものと考えられます。この周辺からは土師器や須恵器が出土し、長者伝説もあります。

- 6 ベロベロという、加賀の郷土料理は、寒天かんてんを溶かして、溶き卵とをショウガ汁かたと共に流して固めた料理で( )とも呼ばれている。

①オキナ      ②チトセ      ③キシズ      ④エビス

(正解④)

「べろべろ」は、祭りや正月のおせち料理など、祝いの席には欠かすことができなかった加賀地方の郷土料理で「エビス」とも呼ばれています。細かくちぎった寒天を火にかけて溶かしたら、調味料を加え、溶き卵をショウガ汁とともに流し入れます。あとは冷やして固めるだけです。近年では、スーパーの惣菜としても売られています。

7 例年8月に行なわれる「ぐず焼き祭り」は、<sup>いぶりはし</sup>動橋町の（ ）<sup>しんじ</sup>神社の神事である。

- ①白山 ②動橋 ③<sup>ふりはし</sup>振橋 ④<sup>はちまん</sup>八幡

(正解③)

動橋町の振橋神社には、「昔、毒蛇が住んでいて、女の子を奪っていくことがあり、これを<sup>つばき</sup>つばき神が退治したという伝説があります。昭和初年、地元の青年たちは、この毒蛇伝説に基づき、「屑」を「ぐず」に、毒蛇を「お化けぐず」に変えて、現在の「ぐず焼き祭り」を始めたといわれています。

8 現在、加賀市内には、<sup>じょうもん</sup>縄文・<sup>やよい</sup>弥生・<sup>こふん</sup>古墳時代の<sup>まいぞうぶんかざい</sup>埋蔵文化財数が、およそ（ ）ヶ所以上確認されたおり、<sup>いせき</sup>県内有数の遺跡の密集地となっている。

- ①650 ②750 ③850 ④950

(正解③)

加賀市内では、埋蔵文化財が約850ヶ所以上確認されていて、県内有数の遺跡の密集地となっています。古代遺跡が多いということは、この地域が、水に恵まれた自然豊かなところで、とても住みやすい土地であったことを示しています。

9 <sup>みやじむかいやま</sup>宮地向山遺跡は、<sup>きゅうせつき</sup>旧石器時代の遺跡で、<sup>ぎよくずい</sup>玉髓や<sup>けいしつがん</sup>珪質岩の硬い石材で作られた（ ）<sup>そうき</sup>や搔器などが見つかっている。

- ①<sup>せきふ</sup>石斧 ②<sup>せんとうき</sup>尖頭器 ③<sup>せきじん</sup>石刃 ④<sup>さいせつき</sup>細石器

(正解③)

宮地向山遺跡は、加賀市内で最も古い人類の痕跡を示すものとして、宮地町の琵琶ヶ池の近くで見つかった旧石器時代の遺跡で、玉髓や珪質岩のきわめて硬い石材で作られた石刃や搔器などが見つかっています。

10 <sup>よこぎた</sup>縄文時代後期の横北遺跡から、数多くの石器や土器が発見されたが、県内でも珍しい（ ）<sup>ちゅうこう</sup>の注口土器や、<sup>じゅじゅつ</sup>呪術用具とも考えられる<sup>いぎょう</sup>異形土製品などを出土した。

- ①丸形 ②<sup>ひしがた</sup>菱形 ③三角形 ④四角形

(正解②)

横北遺跡は、昭和31年3月と同51年5～7月にかけて発掘調査され、多くの石器類や土器類が発見されました。その中でも注口土器と土錘形の土製品が注目されました。注口土器は菱形をした完形品で県内でも類例がなく、また異形土製品は一種の呪術具であると考えられ、県内最初の出土となっています。

11 6世紀中頃に仏教が伝来すると<sup>うじでら</sup>氏寺が<sup>こんりゅう</sup>建立されるようになった。現在、加賀市内でも（ ）<sup>ゆみなみ</sup>・<sup>つばくら</sup>弓波・<sup>ほうが</sup>津波倉・<sup>たかお</sup>保賀・高尾の5ヶ所で瓦や土台石等の出土品や遺構が確認されている。

- ①<sup>なんごう</sup>南郷 ②<sup>くろせ</sup>黒瀬 ③<sup>さくみ</sup>作見 ④<sup>みやじ</sup>宮地

(正解④)

この時代に建てられた5ヶ所の寺院には、あと宮地廃寺があります。宮地町と篠原町との間の水田の中に「じょうじやのかま」と呼ばれる大きな石があり、宮地廃寺の塔心礎に使われた石とされています。

12 平安末期の白山信仰の<sup>ほんちぶつ</sup>本地仏として貴重な山代温泉<sup>やくおういんあんち</sup>薬王院安置の「木造（ ）」<sup>めいじ</sup>は、明治<sup>いしん</sup>維新まで大聖寺<sup>じこういん</sup>慈光院の本尊<sup>ほんぞん</sup>でした。

- ①<sup>あみだによらいぞう</sup>阿弥陀如来像 ②<sup>しょうかんのんぞう</sup>聖観音像 ③<sup>じゅういちめんかんのんぞう</sup>十一面観音像 ④<sup>だいにちによらいぞう</sup>大日如来像

(正解③)

現在、山代温泉の薬王院に安置されている「木造十一面観音像」は、もとは大聖寺慈光院の本尊で、山口玄蕃が前田利長に攻め滅ぼされた際に、池に投げ入れられて難を逃れたと伝えられています。明治維新後、同院が廃寺となったので、同じ白山五院で同宗派の薬王院へ移されました。

13 寿永2年(1183)、篠原の合戦で、木曾義仲軍の( )に討たれた平家軍の老武者、齋藤別当実盛が白髪を黒く染めて参戦したという伝説は、武人の哀れを物語るものとして語り継がれている。

- ①手塚太郎光盛 ②比企藤内朝宗 ③林六郎光明 ④今井四郎兼平

(正解①)

齋藤実盛は越前出身で武蔵国長井荘に住し、当初は源義朝に仕えていたが、平治の乱の後には平家に属して活躍しました。寿永2年木曾義仲追討のために北国に向かい、加賀の篠原で手塚光盛に討たれました。この時、老武者とあなどられることを恥とし、白髪を黒く染めて参戦しましたが、義仲の家来が討ち取った首を池で洗うと、黒髪はたちまち白髪に変わったといい、義仲はそれが命の恩人実盛の首と分かり、涙を流したと伝えられています。

14 鎌倉時代、東国御家人の一人で、伊豆国を拠点としていた狩野氏は、江沼郡内の庄園を治める( )となって勢力を誇った。

- ①肝煎 ②郷長 ③地頭 ④国主

(正解③)

鎌倉時代から南北朝時代にかけて、江沼郡では、平安時代末以来の武士は姿を消し、代わって東国御家人の外来地頭が勢力をもつようになりました。その代表が狩野氏です。狩野氏は伊豆を本拠とする一族ですが、13世紀半ば以降、江沼郡福田庄の地頭として登場し、やがて庄内の菅生社の領有権をも入手するようになり、江沼郡で最も有力な国人(土豪)にまで成長しました。

15 建武2年(1335)、中先代の乱に呼応して、北陸では( )の軍勢が上洛を目指して南下したが、大聖寺城に立て籠もる建武政権の狩野一党と応援に赴いた越前の軍勢により潰滅された。

- ①北条時行 ②名越時兼 ③足利尊氏 ④新田義貞

(正解②)

鎌倉幕府の崩壊によって成立した建武政権に対して、各地で反乱が起こったが、その最大な反乱が、建武2年(1335)7月、北条高時の子時行を擁立した中先代の乱です。これに呼応した越中の前守護名越時有の子時兼が越中・加賀・能登の軍勢を集め、上洛しようと南下した際、「大聖寺ノ城」に立て籠もる狩野一党が、越前からの援軍を得て時兼軍を阻止し、殲滅させました。

16 応永26年(1419)の裏書のある『親鸞絵伝』を所蔵する( )は、15世紀初頭、高田派や三門徒派が優勢な状況の江沼郡で、数少ない本願寺派寺院であった。

- ①月津興宗寺 ②河崎専称寺 ③山代専光寺 ④荻生願成寺

(正解④)

山田光教寺2世顕誓の『復古裏書』によれば、応永14年(1407)に越前藤島の超勝寺が開かれた時、本願寺直参の荻生願成寺・河崎専称寺・長崎称名寺・宮越仰西寺の4ヶ寺を除く、加賀の本願寺派寺院は超勝寺の与力とされています。このことは、これら4ヶ寺はそれ以前からの本願寺派寺院であったことを示しています。

17 延徳3年(1491)、室町幕府管領細川政元に同行し北陸道を通じた( )は、それまでの浜通り道ではなく、中通り道をたどって越後に下向した。

- ①鴨長明 ②一休宗純 ③冷泉為広 ④吉田兼好

(正解③)

延徳3年、管領細川政元は歌人冷泉為広を同行させ越後に下向したが、旅の目的は表向きには奥州の修験道の修行となっていますが、実際は対立する10代将軍足利義材の廃立計画を越後守護上杉房定に協力を求めることにあったと考えられています。

18 大聖寺城主溝口秀勝<sup>みぞぐちひでかつ</sup>は、慶長3年(1598)4月に越前国の北庄城主堀秀治<sup>ほりひではる</sup>が越後国の春日山城に移動を命じられことに伴い、同国の( )に移動させられた。

- ①新発田<sup>しばた</sup>      ②新潟<sup>にいがた</sup>      ③高田<sup>たかだ</sup>      ④村上<sup>むらかみ</sup>

(正解①)

越前北庄城主堀秀治(丹羽長重の後任、堀秀政の子)は、慶長3年(1598)4月に豊臣秀吉の命により越後(新潟県)春日山へ移動させられました。この移動に伴い、堀秀治と与力関係にあった大聖寺城主溝口秀勝は同新発田に、小松城主村上頼勝は同本庄(現村上市)にそれぞれ移動しました。この移動は同年正月の越後春日山城主上杉景勝の会津(福島県)移封に伴うものでした。

19 大聖寺城主山口玄蕃宗永<sup>やまぐちげんばむねなが</sup>は、慶長5年(1600)8月3日の大聖寺合戦で2万5000人の大軍を率いた金沢城主( )に攻められ、長男修弘<sup>ながひろ</sup>とともに自決した。

- ①前田利家<sup>まえだとしいえ</sup>      ②前田利長<sup>まえだとしなが</sup>      ③前田利常<sup>まえだとしつね</sup>      ④前田利政<sup>まえだとしまさ</sup>

(正解②)

大聖寺城主山口玄蕃宗永は、慶長5年(1600)8月3日に大聖寺合戦で2万5000人の大軍を率いた金沢城主前田利長に攻められ、長男修弘とともに自決しました。山口玄蕃宗永の首塚は大聖寺新町の福田橋詰にあり、全昌寺の境内には松江市(島根県)在住の山口氏の末裔が明治23年(1890)に建てた石碑があります。

20 加賀藩主3代前田利常<sup>としつね</sup>は、寛永2年(1625)に郡奉行吉田伊織<sup>よしだいおり</sup>の家来久世徳左衛門<sup>くぜとくざえもん</sup>に命じ、別所村領の大聖寺川から水を取り入れて山代新村に至る( )用水を完成させた。

- ①矢田野<sup>やたの</sup>      ②鹿ヶ鼻<sup>しかがはな</sup>      ③御水戸<sup>おすいど</sup>      ④市之瀬<sup>いちのせ</sup>

(正解④)

加賀藩主3代前田利常は、寛永2年(1625)に郡奉行吉田伊織の家来久世徳左衛門に命じ、別所村領の大聖寺川から水を取り入れて山代新村に至る市之瀬用水を完成させました。同6年には山代神明宮(市之瀬用水)を鎮守とし、社地を寄進するとともに徳左衛門を神官に任命しました。その後、市之瀬用水は大聖寺藩主2代前田利明により寛文5年(1665)に動橋川まで延長されました。

21 大聖寺藩主2代前田利明<sup>めがわ うわの にゅうぜん</sup>は、万治3年(1660)に越中新川郡の目川・上野・八幡・入膳村など7か村と加賀能美郡の馬場・島・串村など( )を交換した。

- ①6ヶ村      ②7ヶ村      ③8ヶ村      ④9ヶ村

(正解①)

大聖寺藩主2代前田利明は、万治3年(1660)に越中新川郡の目川・上野・八幡・入膳・道市・青木・君島村など7ヶ村(4322石余)と加賀能美郡の馬場・島・串・日末・松崎・佐美村など6ヶ村(4302)を交換しました。能美郡6ヶ村は後に島から蓑輪、串から串出・串茶屋、松崎から村松、佐美から浜佐美が分村して11ヶ村になりました。

22 大聖寺藩では、加賀藩と同様に専売制の「塩手米制」<sup>せんばいせい</sup>により塩を生産したが、江戸後期には( )<sup>しのはらしん はまさび</sup>・篠原新・浜佐美村の3か村のみの生産となった。

- ①塩屋<sup>しおや</sup>      ②篠原<sup>しのはら</sup>      ③塩浜<sup>しおはま</sup>      ④伊切<sup>いきり</sup>

(正解④)

大聖寺藩でも、加賀藩と同様に藩の専売制である「塩手米制」により塩を生産しました。江戸後期には「土産塩」と称する他領産の塩が移入され、領内産の塩価格が下落して製塩村が伊切・篠原新・浜佐美の3か村に減少し、天保元年(1830)頃には「塩役制」へ移行しました。江戸後期までは、片野・中浜(上木出村)・小塩・塩浜・塩屋などの村々でも塩を生産しました。

23 大聖寺藩では、寛文期(1661~72)に領内の村々で茶の生産が始まり、江戸後期には宇治茶の製法を導入した( )村が領内第一の生産地になった。

- ①山代<sup>やましろ</sup>      ②保賀<sup>ほうが</sup>      ③打越<sup>うちこし</sup>      ④片山津<sup>かたやまづ</sup>

(正解③)

大聖寺藩主2代前田利明は、寛文期（1661～72）に山城（京都府）・近江（滋賀県）両国から茶の実を購入し、領内の村々へ配分しました。茶役は江戸後期まで串村が最も多く、領内第一の生産地でした。串村甚四郎は代々大聖寺藩の茶問屋を務め、大聖寺町に下問屋2人を置いていました。打越村は弘化元年（1844）に宇治茶の製法を導入し、領内第一の生産地となりました。

- 24 大聖寺藩主2代前田利明は、延宝4年（1676）に中田村五郎兵衛と足軽の栗村茂右衛門を（ ）二俣村に派遣し、御料紙や日常紙の製法を習得させた。
- ①江沼郡 ②能美郡 ③石川郡 ④河北郡

（正解④）

大聖寺藩主2代前田利明は、延宝4年（1676）に中田村五郎兵衛と足軽の栗村茂右衛門を河北郡二俣村に派遣し、御料紙や日常紙の製法を習得させました。日常紙は「紙屋谷」と呼ばれた中田・長谷田・上原・塚谷など4か村（土谷村を加え5か村）で、また御前延紙・銭手形紙など御料紙は中田村の角屋家と大茂谷家で製造されました。

- 25 大聖寺藩主は、参勤交代で下街道を通行する際、必ず金沢城下に宿泊して金沢城へ出向き、藩主や重臣に挨拶するとともに宝円寺（金沢前田家の菩提寺）や（ ）を参詣した。
- ①芳春院 ②玉泉寺 ③長国寺 ④天徳院

（正解④）

大聖寺藩主の参勤交代には、金沢方面へ向かう中山道経由の下街道（131里）と福井方面へ向かう中山道経由の上街道（148里）、東海道経由の上街道（139里）の3コースがあり、距離が短かった下街道が最も多く利用されました。大聖寺藩主は下街道を通行する際、必ず金沢城下の旅籠に宿泊して、金沢城へ出向き藩主や重臣に挨拶するとともに宝円寺や天徳院を参詣しました。

- 26 大聖寺藩主の在任期間は、5代前田利直の42か年や2代前田利明の33か年を除けば、短期間の藩主が多く、13代前田利行の在任期間はわずか（ ）であった。
- ①1ヶ月 ②5ヶ月 ③10ヶ月 ④1ヶ年

（正解②）

大聖寺藩主の在任期間は、藩祖利治が22ヶ年、2代利明が33ヶ年、3代利直が19ヶ年、4代利章が27ヶ年、5代利直が42ヶ年、6代利精が5ヶ年、7代利物が7ヶ年、8代利考が18ヶ年、9代利之が31ヶ年、10代利極が2ヶ年、11代利平が12ヶ年、12代利義が7ヶ年、13代利行が5ヶ月、14代利豊が15ヶ年でした。

- 27 明治11年（1878）、江沼郡役所が設置され、その郡のもとに23の（ ）が置かれた。
- ①区長役場 ②区役所 ③町役場 ④戸長役場

（正解④）

明治11年7月にはようやく「郡」が行政区画として公認され、大聖寺に江沼郡役所が設置され、郡長が配置されました。また、郡のもとには、23ヶ所の「戸長役場」が置かれ、同17年には14ヶ所に統合されました。明治22年には、市制・町村制が実施され、江沼郡は1つの町（大聖寺）と24の村に整理されました。

- 28 大聖寺藩士石川嶂は、明治2年（1869）、琵琶湖の大津と（ ）を結ぶ蒸気船一番丸を就航させた。
- ①彦根 ②長浜 ③海津 ④高島

（正解③）

大聖寺藩は明治2年3月に蒸気船一番丸を、続いて同年10月には蒸気船二番丸を琵琶湖に就航させました。蒸気船の発案者は、東方芝山の指導を受けた石川嶂でした。この汽船は木造の外輪船で、大津—海津間64キロメートルを往復する日本最初の川蒸気船となりました。

- 29 大津事件で、ロシア国のニコライ皇太子の命を救った人力車夫の一人は、江沼郡（ ）村出身の北ヶ市市太郎であった。

- ①庄            ②西島            ③加茂            ④桑原

(正解③)

北ヶ市市太郎は江沼郡庄村字加茂（現在の加賀市加茂町）の出身で、明治20年、29歳のとき、京都に出て人力車の車夫として働いていました。大津でロシア国のニコライ皇太子が暴漢に襲われたとき、その命を助け、北ヶ市は、もう1人の車夫、向畑と共に一躍、救国の英雄として全国から注目を集めることになりました。

- 30 明治12年(1879)の4月から5月にかけて開催された大聖寺博覧会はくらんかいの会場は、大聖寺の(            )と遷名中学校せんめいちゅうの2ヶ所が使われた。

- ①錦城小学校      ②錦城中学校      ③錦城東小学校      ④京達小学校けいき

(正解①)

明治12年(1879)の「大聖寺博覧会」は、旧大聖寺藩の家老 前田幹もときや権大参事飛鳥井清ごんのだいさんじあすからが企画したもので、15日間にわたって、錦城小学校と遷明中学校の2ヶ所を会場に行なわれました

- 31 片山津温泉は、明治15年(1882)、石川郡観音堂村かんのんどうむらから井戸掘りの(            )を招き、特殊な工法で温泉を掘削くっさくし、安定した湯量ゆりょうを確保かくほすることに成功した。

- ①湯出甚平ゆでじんべい      ②橋三平たちばなさんべい      ③森仁平もりへい      ④矢田四郎やたしろう

(正解③)

片山津では、明治15年(1882)6月28日、石川郡観音堂村から井戸掘りの森仁平を招き、特殊な工法で掘削し、湯量を確保することに成功しました。のちに、片山津温泉は、この日を開湯記念日と定め、「湯の祭り」が始められるきっかけとなりました

- 32 昭和23年(1948)6月、福井県丸岡町しんげんちを震源地とする大地震おおじしんが起き、江沼郡においても、死者(            )名、全壊した住宅が791戸と、大きな被害ひがいを出した。

- ①28            ②39            ③46            ④58

(正解②)

昭和23年(1948)6月28日の夕方、福井県坂井郡丸岡町（現在の福井県坂井市丸岡町）付近を震源とする大地震が発生しました。地震の規模はマグニチュード7.1の直下型地震であったため、江沼郡全域で、死者39名、負傷者451名、住宅全壊791戸などの被害を出す大惨事となりました。

- 33 平安後期、加賀山代温泉おんせんじの温泉寺いんせいに隠棲した僧(            )は、悉曇学しつたんがくや梵字ぼんじの発音はつおんを研究し、わが国の50音図の配列に大きな影響を与えた。

- ①浄巖じょうごん      ②安然あんねん      ③明覚みょうかく      ④智広ちこう

(正解③)

明覚は、天台宗延暦寺で音韻学を学び、のち加賀山代温泉の温泉寺に隠棲して「温泉房」と号し、「加州隠者」と称した。悉曇学や梵字の発音などを研究し、わが国の50音字の配列に大きな影響を与えました。現在、薬王院境内にある国指定重要文化財の石造五輪塔は、その供養塔と伝えています。

- 34 建武4年(1337)、南朝方なんちょうの新田義貞にったよしさだに従って越前に入った(            )は、狩野一党かのと共に細呂木ほそろぎに城を築き、足利方あしかがの津葉清文つばきよふみが籠もる大聖寺の城を攻撃した。

- ①高師直こうのもろなお      ②楠木正成くすのきまさしげ      ③畑時能はたときよし      ④北畠顕家きたばたけあきいえ

(正解③)

畑時能は、南朝方の新田義貞に従って越前に入りましたが、建武5年(1338)義貞が藤島で戦死後も、越前で足利方の斯波高経と激闘を繰り返し、暦応4年(1341)大野郡の鷲ノ岳で激戦の末戦死しました。時能の出自は武蔵国秩父郡とされていますが、俗説に大聖寺畑町という伝承があります。

- 35 文明13年(1481)に起きた越中一向一揆えっちゅういっこういっきを指揮とやまぼうするため、土山坊に入寺した(            )は、同18年頃に江沼郡の門徒から取り立てられて山田光教寺やまだこうきょうじに入った。

① 蓮乗

② 蓮綱

③ 蓮誓

④ 蓮悟

(正解③)

山田光教寺の成立は必ずしも明確ではありません。山田光教寺の名跡を継承した金沢光教寺の由緒書によれば、文明3年から同7年の間に山田に一寺を開き、同7年以降のある時期に蓮誓が入ったこととなりますが、『六日講四講并所々御書』(龍谷大学蔵)所収の六日講宛御書の消息から文明18年にすでに成立していた光教寺に蓮誓が江沼郡中より取り立てられたと考えられます。

36 一向一揆の大將藤丸新介は、朝倉宗滴が江沼郡に侵入した時、南郷城で迎え撃ったが敗退。その後、越後の上杉景勝に仕えたが、( )の戦いで自刃したという。

① 末森城

② 金沢御堂

③ 七尾城

④ 魚津城

(正解④)

藤丸新介は、江沼郡赤尾を拠点とする一向一揆の大將で、天文24年(1555)朝倉宗滴が江沼郡に侵攻した時、南郷城に黒瀬掃部丞とともに迎え撃ったが敗退しました。その後、天正5年(1577)越後の上杉景勝に仕え、魚津城の守備につきましたが、同10年柴田勝家に攻められて自刃したといわれています。

37 小塩辻村の初代鹿野小四郎は、十村役を約15年間務めたのち、宝永6年(1709)に貴重な農書( )を著した。

① 農業全書

② 農業蒙訓

③ 農事遺書

④ 耕稼春秋

(正解③)

初代鹿野小四郎は、元禄4年(1691)に目付十村となり、同6年に吉崎村から地の利がよい小塩辻村に引越(引越十村)を命じられました。このほか、右村の堀野新四郎、島村の和田五郎右衛門、分校村の和田半助、動橋村の橋本源左衛門なども代々十村役を務めました。初代鹿野小四郎は宝永6年(1709)に貴重な農書「農事遺書」を著しました。

38 大聖寺藩医樫田幻覚の7男大田錦城は、江戸に遊学して考証学派を大成し、論語など儒教の古典籍について記した( )を出版するなど活躍した。

① 九経談

② 錦城文録

③ 稽古録

④ 柳橋日録

(正解①)

大聖寺藩は、幕府や諸藩と同様に江戸前期から儒学を学ぶ儒者を多く輩出した。なかでも、大聖寺藩医樫田幻覚の7男大田錦城は、江戸で儒教の古典の論語などを記した『九経談』(全10巻)、東アジア各国の国名や地名をまとめた『海外諸国名録』(全1巻)、漢籍や詩について書き留めた『柳橋日録』など全143冊を著し大活躍しました。

39 大聖寺藩士の小塚藤十郎(秀得)は、上木・瀬越・塩屋村など加賀海岸の砂丘地に黒松を植栽するとともに、天保15年(1844)には領内の地誌本である( )を完成させた。

① 芟憩紀聞

② 加賀江沼志稿

③ 藩国見聞録

④ 秘要雑集

(正解②)

大聖寺藩士の小塚藤十郎(秀得)は、文政7年(1824)に植物方奉行、翌年に松奉行となり、上木・瀬越・塩屋村など加賀海岸の砂丘地に数多くの黒松を植栽しました。藤十郎の人生は、将に黒松の植林事業に捧げたものでした。また、大聖寺藩の地誌本である「加賀江沼志稿」の編纂にも力を注ぎ、天保15年(1844)に32巻の大著を完成させました。

40 大聖寺藩主14代前田利鬯は、詩歌・書画や茶道にすぐれ、特に能楽は( )の巨匠と評され、その後の大聖寺における能楽普及に多大な貢献をした。

① 宝生流

② 金春流

③ 観世流

④ 金剛流

(正解①)

大聖寺藩主14代前田利鬯は、加賀藩主13代前田斉泰の7男であり、安政2年(1855)に兄利行が急死したため、その跡を継ぎ最後の大聖寺藩主となりました。利鬯は詩歌・書画や茶道にすぐれ、特に能楽は宝生流の巨匠と評され、その後



の大聖寺における能楽普及に多大な貢献をしました。明治17年(1884)に子爵、同30年には貴族院議員となりました。

- 41 大聖寺藩士の石川嶂いしかわたかしは、明治2年(1869)5月に琵琶湖に蒸気船を就航させるため、金沢・大聖寺両藩の出資により( )を設立した。

①長崎造船所ながさきぞうせんじょ ②八幡製鉄所やはたせいてつじょ ③兵庫製鉄所ひょうごせいてつじょ ④横浜造船所よこはまぞうせんじょ

(正解③)

大聖寺藩士の石川嶂は、明治元年(1868)に長崎で造船学を学び、蒸気機関2組をイギリス人から購入して、翌2年に大津の一庭啓二らとともに琵琶湖に日本最初の蒸気船を就航させました。その後、金沢・大聖寺両藩の出資により兵庫製鉄所(のち川崎造船所)を設立しました。また、同14年には大聖寺商法会議所の初代会頭になりました。

- 42 瀬越村せごえの北前船主である4代大家七平おおいえしちへいは、明治中期に和船を西洋汽船わせん せいようきせんに切り替え、ハワイやカムチャッカ、南洋諸島などへの運輸業を行い、北海道の( )に支店や大家倉庫を建てた。

①函館はこだて ②小樽おたる ③札幌さつぽろ ④根室ねむろ

(正解②)

瀬越村の北前船主である4代大家七平は、明治中期に和船を西洋汽船に切り替え、ハワイやカムチャッカ、南洋諸島などへの運輸業を行い、北海道の小樽に支店や大家倉庫(小樽市指定文化財)を建てました。明治末期からは福島県や栃木県の鉾山開発にも出資しました。大正10年(1921)には大家商事株式会社を設立し、事業を会社組織に改めました。

- 43 寿永2年(1183)の篠原合戦しのはらかっせんで、木曾義仲きそよしなかの家来に討ち取られた平家の武将、齋藤実盛さいとうさねもりが白髪を染める時に使用した鏡かがみを投げ入れたと伝わる「鏡の池」は( )にある。

①黒崎町くろさき ②深田町ふかた ③篠原町しのはら ④千崎町せんざき

(正解②)

加賀市指定文化財の「鏡の池」は、加賀市深田町に所在する約12㎡の小池で、その池底に凝灰岩容器の中に直径8.5m、裏面に鶴亀の模様が入った銅鏡が納められています。しかし、その鏡が実盛の使用した鏡であるという確証はありません。

- 44 加賀市八日市町は、平安時代末期の歌人である西行法師さいぎょうほうしが都へ戻る際、同行の弟子( )と別れたところで、いつしかその場所には都戻り地蔵みやこもど じぞうが安置された。

①一遍いっぺん ②西住さいじゅう ③太空たいくう ④法然ほうねん

(正解②)

平安時代末期の代表的歌人西行法師が、弟子の西住と諸国行脚を行った際、加賀国の大聖寺川支流の杉ノ水川近くに滞在したと伝えられています。その両僧が都へ戻ろうと八日市まで来た時、西住が杉ノ水川近くに定住することとし、西行法師と別れたといわれています。その場所にいつしか地蔵が安置され、「都もどり地蔵」と呼ばれるようになりました。なお、西住が定住した地は、後に西住村とよばれたといわれています。

- 45 山中温泉荒谷町の石川県内水面水産センターには、国指定の特別天然記念物のオオサンショウウオ2匹しいくが飼育されているが、うち国内最大級の1匹は( )で保護されたものである。

①保賀町付近ほうが ②九谷町付近くたに ③鶴仙溪かくせんけい ④我谷町付近わがたに

(正解③)

オオサンショウウオは世界最大の両生類で、日本では岐阜県以西と九州・四国の山地の河川上流域に生息しています。現在、山中温泉荒谷町の石川県内水面水産センターで2匹が飼育されており、うち国内最大級の1匹は昭和48年(1973)に大聖寺川鶴仙溪で保護されたものです。

- 46 片野鴨池周辺で江戸時代から行われてきた鴨を捕獲する猟法は坂網猟さかあみりょうと呼ばれ、その坂

網を放り投げる場所を（ ）という。

- ①網場<sup>あみば</sup> ②猟場<sup>りょうば</sup> ③投げ場 ④坂場<sup>さかば</sup>

(正解④)

片野鴨池周辺では、矢竹でつくったY字形の枠に網を張り付けた、長さ約3.5mの坂網を飛来する鴨の群れに向かって、坂場から放り投げて捕獲する猟法を「坂網猟法」といい、その用具と共に石川県の民俗文化財に指定されています。

- 47 加賀藩主3代前田利常<sup>としつね</sup>の夫人天徳院<sup>てんとくいん</sup>は、将軍（ ）の娘珠姫<sup>たまひめ</sup>であり、元和5年(1619)に「蒔絵角赤手筥」<sup>まきえすみあかてぼこ</sup>（婚礼調度品<sup>こんれいちょうどひん</sup>）を敷地の菅生石部神社<sup>すごういそべ</sup>に寄進した。

- ①徳川家康<sup>とくがわいえやす</sup> ②徳川秀忠<sup>とくがわひでただ</sup> ③徳川家光<sup>とくがわいえみつ</sup> ④徳川家綱<sup>とくがわいえつな</sup>

(正解②)

加賀藩主3代前田利常の夫人天徳院は、元和5年(1619)に「蒔絵角赤手筥」(漆芸品)を菅生石部神社の祭礼にあたり寄進しました。これは2代将軍徳川秀忠の2女珠姫が慶長3年(1601)に僅か3歳で利常に輿入れしたとき、婚礼調度品の一つとして持参したものと伝えられています。これは国指定文化財であり、現在は東京国立博物館に保管されています。

- 48 元禄2年(1689)松尾芭蕉<sup>まつおばしろう</sup>は奥の細道<sup>あんぎや</sup>の行脚の途中、山中温泉<sup>いづみや</sup>の湯宿泉屋<sup>とうりゆう</sup>に逗留し、当時、（ ）の当主久米之助<sup>くめのすけ</sup>に2句を記した真蹟<sup>しんせき</sup>を与えたと伝えられている。

- ①12歳 ②14歳 ③16歳 ④18歳

(正解②)

松尾芭蕉は、元禄2年(1689)7月(新暦9月)に「奥の細道」の旅の途中、山中温泉の湯宿泉屋に8日間(7月27日～8月5日)逗留しました。芭蕉は泉屋の当主久米助(当寺14歳)に自号「桃青」の一字をとった「桃妖」の号とともに、「わせの香や 分入る右は 有磯海」と「やまなかや 菊はたおらじ ゆのにはい」の2句を1紙に記入した真蹟を与えたと伝えられています。

- 49 加賀市（ ）町の白山神社には、北前船主<sup>きたまえせんしゅ</sup>の廣海家<sup>ひろうみ</sup>・大家家<sup>おおいえ</sup>や船頭<sup>ふねえ</sup>らが航海<sup>あんぜん</sup>の安全祈願<sup>きがん</sup>や無事帰郷<sup>ぶじききやう</sup>を神に感謝<sup>ほうのう</sup>して奉納<sup>ふなえ</sup>した53面の船絵馬<sup>ふねえ</sup>がある。

- ①吉崎<sup>よしざき</sup> ②塩屋<sup>しおや</sup> ③瀬越<sup>せごえ</sup> ④橋立<sup>はしたて</sup>

(正解③)

加賀市瀬越町の白山神社には、北前船主の廣海家・大家家や船頭らが航海の安全祈願や無事帰郷を神に感謝して奉納した53面の船絵馬があります。この船絵馬のうち年代の確認できるものでは、慶応3年(1867)から大正5年(1916)までのものがあり、海運史の資料としてだけでなく、和船から西洋帆船・汽船へと移り変わりの様子を知ることができます。

- 50 大聖寺西端<sup>きんじょうざん</sup>の錦城山<sup>だいしょうじじょう</sup>にあった大聖寺城<sup>げんな</sup>が、元和元年(1615)の「一国一城令」<sup>いっこくいちじょうれい</sup>により廃城<sup>はい</sup>となったため、錦城山は明治期まで（ ）と呼ばれていた。

- ①御城山<sup>おしろやま</sup> ②城跡山<sup>しろあとやま</sup> ③御留山<sup>おとめやま</sup> ④廃城山<sup>はいじょうやま</sup>

(正解①)

大聖寺西端の錦城山には、南北朝時代から元和元年(1615)まで数度に亘って大聖寺城が設置されました。南北朝時代や戦国時代の一向一揆が拠った大聖寺城は不詳ですが、織田信長の家臣や溝口秀勝、山口宗永らによって近世城郭として整備されました。この錦城山は、大聖寺城が元和元年(1615)の「一国一城令」により廃城となったため、明治期まで御城山(古城山)と呼ばれていました。

- 51 大聖寺町の家柄町人<sup>いえがらちょうにん</sup>である4代吉田屋伝右衛門<sup>よしだやでん えもん</sup>は、町年寄役<sup>まちどしよりやく</sup>や銀方役<sup>ぎんかたやく</sup>・銭方役<sup>ぜにかたやく</sup>などを務め、文政6年(1808)に（ ）村で「吉田屋窯」<sup>よしだやがま</sup>を開いた。

- ①吸坂<sup>すいさか</sup> ②九谷<sup>くたに</sup> ③栄谷<sup>さかえだに</sup> ④山代<sup>やましろ</sup>

(正解②)

大聖寺町の家柄町人吉田屋は、本姓を豊田家と称して代々藩の町年寄役や銀方役・銭方役を務め、4代伝右衛門は文政6年(1808)に九谷村で「吉田屋窯」を開きました。吉田家文書は、町役の任免に関する「役務」、家政や祭祀に関する「家」、商売に関する「家業」、詩歌・書道・絵画の作品を収めた「文芸」の4つに大別されます。

52 山中温泉の医王寺が所蔵する「陶製金剛童子立像」は、田村権左右衛門と（ ）が九谷焼の成功を喜び寄進したものと伝えられている。

- ①後藤才次郎 ②土田清左衛門 ③吉田屋伝右衛門 ④粟生屋源右衛門

(正解①)

山中温泉の医王寺が所蔵する「陶製金剛童子立像」は、田村権左右衛門と後藤才次郎が九谷焼の成功を喜び寄進したものと伝えられています。九谷焼初期の作品として陶像は珍しいものですが、剣や足の部分の深い緑釉は、九谷焼初期の深い色調に通じる趣きがあります。金剛童子の名称は、明治33年(1900)に明治天皇の天覧に供したときに命名されたといわれています。

53 加賀市動橋町の（ ）は、精密ピン、軸受けコロなどの工作機械部品を高度な技術で製造する企業として知られている。

- ①江沼工業 ②村田機械 ③月星製作所 ④東野産業

(正解④)

加賀市基幹産業は、大同工業や江沼チェーン製作所、月星製作所などの機械製造業が中心ですが、ベアリングや精密ピンなどの機械部品を高い技術で製造する東野産業や高度な溶接技術を持つパナソニック溶接システム加賀(株)、各種の金属加工機を製造する(株)ソディックなど、多くの企業が加賀のものづくり産業を牽引しています。

54 加賀市内には、これまで、宇谷野工場団地、小塩辻工場団地の2つの産業団地があったが、近年、新保町の農地を造成して、分譲開始した（ ）産業団地が新たに加わった。

- ①新保・伊切 ②片山津 IC ③加賀北部 ④湖北

(正解②)

現在、加賀市内の産業団地には、昭和58年に整備された宇谷野工場団地と、平成9年に完成した小塩辻工場団地、それと令和2年に完成した片山津 IC 産業団地の3ヶ所があります。片山津 IC 産業団地は、新保町の農地3.6haを造成し、令和2年度から分譲開始を行っているもので、立地条件が良く、製造業や運輸業、情報通信業など幅広い業種の企業進出が期待されています。

55 令和3年9月に公開された大聖寺（ ）は、加賀市を代表する機械メーカーである大同工業社長家の旧新家邸宅であり、市の有形文化財に指定されている。

- ①無限庵 ②鴻玉荘 ③致遠館 ④红柿荘

(正解②)

加賀市指定文化財旧新家邸宅の「大聖寺鴻玉荘」は、池を備えた庭園を囲むように、主屋・離れ座敷・茶室・土蔵といった建物が並びます。住居として使われていた主屋は、大正時代に建てられた料亭を改装したもので、離れ座敷・鴻玉荘は戦後に建てられた客座敷です。建物はいずれも大聖寺地区では他に例がなく、庭園も含めて貴重なものです。

### 専門テーマ「深田久弥」

56 大聖寺中町出身の作家、深田久弥は大正5年(1916)、旧制の（ ）中学校に入学した。

- ①福井 ②大聖寺 ③金沢第二 ④小松

(正解①)

深田久弥は錦城小学校を卒業後、旧制の福井県立福井中学校に入学しました。その後、第一高等学校から東京帝国大学へと進みました。なお、福井中学校は現在の福井県立藤島高校です。久弥はそのため、越前と加賀の両方を「ふるさと」と書き記しています。

57 深田久弥は、昭和5年(1930)に( )を**文藝春秋**に発表し、これがきっかけで、東京帝国大学を中退し、作家活動に入った。

- ①津軽の野づら ②鎌倉夫人 ③オロッコの娘 ④あすなろう

(正解③)

昭和2年、久弥は、東京帝国大学文学部哲学科に在籍しつつ改造社に入社。懸賞小説の下読みをする過程で北島八穂と知り合い、恋に落ちました。昭和5年、小説『オロッコの娘』を文藝春秋に発表。この作品が好評だったことに勇気を得て大学を中退し、勤めを辞めて文筆一本の生活に入りました。

58 深田久弥は、昭和40年(1965)『日本百名山』を発表し、( )を受賞した。これにより、その後、山の文学者として広く知られるようになった。

- ①日本芸術院賞 ②日本山の文学賞 ③毎日出版文化賞 ④読売文学賞

(正解④)

読売文学賞は読売新聞社が制定した文学賞で、1949年に第二次世界大戦後の文芸復興の一助として発足しました。小説、戯曲・シナリオ、随筆・紀行、評論・伝記、詩歌俳句、研究・翻訳の6部門があり、『日本百名山』は第16回読売文学賞「評論・伝記」部門での入賞でした。

59 深田久弥は、昭和46年(1971)3月山梨県の( )を登山中に、**脳溢血**により急逝した。

- ①槍ヶ岳 ②駒ヶ岳 ③茅ヶ岳 ④穂高岳

(正解③)

茅ヶ岳は山梨県にある山。標高は1,704m。「日本百名山」の著者・深田久弥氏終焉の山として知られています。山頂からは富士山をはじめ、北アルプス、南アルプスなどの数々の日本百名山の絶景を堪能できます。登山口には深田久弥記念公園があり、公園内には「百の頂に百の喜びあり」と刻まれた石碑があります。

60 平成14年(2002)、大聖寺番場町にあった( )会社の事務所や石蔵を利用して「深田久弥山の文化館」がオープンした。

- ①織物 ②酒造 ③機械製造 ④陶器

(正解①)

山の文化館の建物は、明治43年に建てられた絹織物工場「山長」の事務所・石蔵・門を修築したもので、平成14年12月に国の登録文化財に登録されました。事務所は木造2階で、外壁をイギリス下見板張とした洋風建築です。現在は、1階を事務所・図書室、2階を集会場として使用しています。石蔵はかつて生糸の保管庫として使われていたもので、木骨石造の2階建てです。